

# 音楽の起源や世界各地の古代の音楽を知つて、クラシック音楽を理解しよう

「クラシック音楽って何？」を知る第一歩

「クラシック音楽」という言葉で思い浮かべるのは何だろうか？ ベートーヴェン？ バッハ？ オーケストラ？

また音楽にはどんな意味があるのだろうか？

明治時代以降、長い間、クラシック音楽といえば、ヘンデルや大バッハが活躍したバロック後期と呼ばれる18世紀初めから、マラーやストラヴィンスキーが活躍した20世紀初

頭までの音楽を指すことが多かった。確かに、その200年余りの間に、ベートーヴェンやモーツァルト、シューベルト、シヨパン、ブラームス、ヴェルディ、ワーグナー、チャイコフスキー……など私たちが音楽の教科書で学んだ数多くの音楽家が活躍している。

しかし20世紀の後半、クラシック音楽の捉え方も少しずつ変わり始めた。私たちの日本にある能・狂言や尺八音楽もクラシック音楽ではないのか？

ようやくヨーロッパの近代の音楽

だけでなく、もっと大きな範囲でクラシック音楽を捉えていこうという姿勢が生まれてきたのだ。

この序章では、そんな流れも汲みながら、ヨーロッパのクラシック音楽を理解していきたい。

## 古代文明の近くには、独自の音楽文化が発生している

今では高度な理論体系を持つことになった音楽だが、古代にはやはり呪術や祭祀との結びつきが強かったようだ。その後、時代が進むにつれ、音楽はどんな風に捉えられていった

のか？

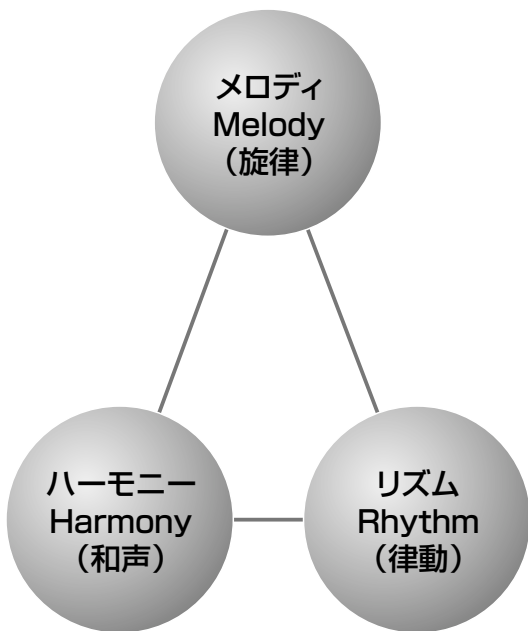
まず、音楽についての哲学者や科学者たちの諸説や音楽の起源について紹介する。

そして、ヨーロッパ以外のアジアやアラビア、インドなどの古代の音楽を概観する。古代文明の発生地域の近くには、やはり独自の音楽文化が育まれていた。

### クラシック音楽の基本構造を形作る3つの要素

近代のヨーロッパでは、音楽を構成しているのは、メロディ（旋律）、リズム（律動）、ハーモニー（和声）の3つの基本要素と考えている。その後ろには、多くの緻密な音楽理論が展開されているのだが、ここでは、メロディとハーモニーを形作っていく「音」、音を一定の秩序に基づい

### 近代ヨーロッパ音楽の基本3要素



て並べることによって作られた「音階」、そしてリズムを形作る基本的な考え方について概観する。

子ども頃、音楽の教科書に載っ

ていた、**C**などの変わった記号や数字の意味、五線譜の読み方の基本についても理解してから、クラシック音楽を眺めていこう。

# 人間の生活の中から 自然に生まれてきた音楽

## 求愛の手段？ 強調された言葉？

音楽とは何だろうか？ どのように生まれたのだろうか？ このテーマは、今まで、哲学者を初め、科学者、経済学者に至るまで、多くの学者たちが、何百年にもわたって考え続けてきた。

「音楽は、異性を求め、誘う行為」だと言ったのは、進化論で有名な生物学者のチャールズ・ダーウイン。「音楽は共同作業を容易にするための手段」と言ったのは、『労働とリズム』を著したドイツの経済学者のカール・ビュッヒャー。そして、「音楽は話し言葉から生まれたもので、それは強調された言葉だ」と唱えたのは、フランスのジャン・ジャック・ルソーやイギリスのハーバート・スペンサーなど哲学者たち。この最後の説は、リヒャルト・ワーグナーな

身体的衝動や情緒に結びつく音楽は、人間の欲求や生活の中から自然に生まれてきた。まず、歌うことから始まって、やがて楽器が生まれた。

どの音楽家を初め多くの人たちにもてはやされたという。

しかし、どの説も間違いではないが、それは音楽のある1つの側面を捉えているにすぎない。音楽は、何か1つの根源から生まれ、成長していったものではない。もつと感情や身体的な衝動、情緒に結びついていて、そこには呪術や民族的な生活習慣などいろいろなものが影響を与えている。

## 音楽は、歌うことから始まった

原始の時代から、世界中の人々はさまざまな場所に移動し、他民族と戦ったり、結婚したりしながら、より良い生活を求めてきた。その中で、自分たちが持っているものよりも便利な道具や強い武器、人をまとめる良い方法があれば、積極的に取り入れ、必

## 定義の諸説

### 神話や伝説

音楽は、神々から人間に授けられたもの。  
歌い手は預言者であり、音楽は魔力を持つ。

### チャールズ・ダーウィン

音楽は、異性を求め、誘う行為。

### カール・ビュッヒャー

音楽は、共同作業を容易にするための手段。

### ジャン・ジャック・ルソー

### ハーバート・スペンサー

音楽は、話し言葉から生まれたもので、それは強調された言葉。

### カール・シュトゥンプ

音によるコミュニケーションの手段。

### カール・グロース

遊戯衝動のひとつ。

要のないものは捨ててきた。しかしその中でも、自分たちが昔から持っていた歌は捨てなかつたようだ。有名な『音楽の起源』という本を書いた比較音楽学者のクルト・ザックスは、それを「人間の魂と動作衝動の表現である歌は、生活の表面的な変わり易さや生存競争に関係がないから」と語っている。音楽は、人類の進化の中でもいちばん変化が少ないものであり、今でも、世界中の民族の中に、それぞれ固有の歌やダンスが昔からの姿のまま残っている。ところで、歌と楽器、どちらの音楽が先に生まれたのだろうか？

この質問については、簡単に答えが出されている

ようだ。まず、歌うことから音楽は始まった。現代文化の影響を受けていない多くの部族では、歌はあるが、いまだ楽器を持っていない。生活する中で、労働を行う中で、人々は元気を出したり、気をまぎらわしたりするために、自然に歌を口ずさんだ。家族が結婚したり、死んだ時、喜びや悲しみを表すために歌を歌った。病気を治したり、雨を乞うたりする時、人々は神に祈りながら、歌を歌い、踊ったのだ。そして、歌から始まった音楽は、やがてより歌を盛り上げるために、自分たちの身近にあったものを使って楽器を生み出した。

## 古代文明の近くには 独自の伝統音楽も発展

### 世界各地に広がる高度な音楽文化

クラシックという言葉を辞書で引くと、「古典的な」あるいは「由緒ある（正統派の）」と書いてある。また、Classic Music と Popular Music Ⅱ 通俗音楽に対して用いられている言葉と定義されている。明治以降の日本では、「クラシック音楽」は、ヨーロッパ、とくに1600年以降の音楽として使われることが多い。

しかしながら、ヨーロッパの音楽のほかにも、古代から、世界中にはさまざまな民族の音楽が存在していた。そして、長い歴史の中で、ヨーロッパの音楽自体もさまざまな音楽と交じり合い、今の形へと変わってきたのだ。ヨーロッパ以外の音楽を、私たちは「民族音楽」と呼んで区別してきたが、ここで

エジプト、アラブ、ペルシア、トルコなどのイスラム地域を初め、インド、中国、インドネシアなどには独自の音楽理論と実践方法が存在する。

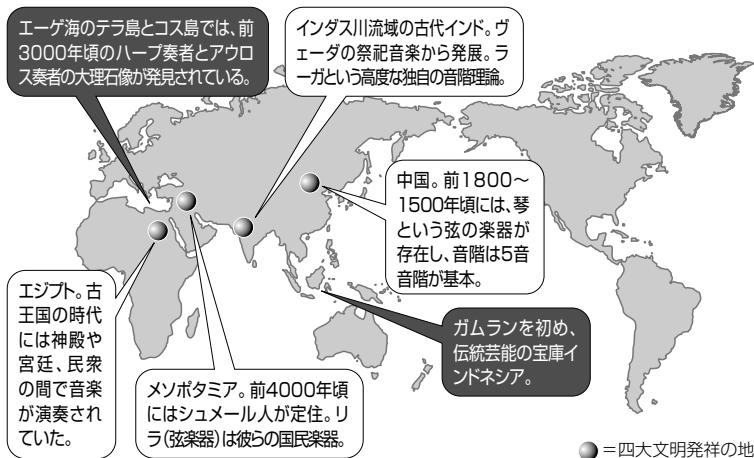
はクラシック音楽の一部として簡単に見てみよう。

古代四大文明として知られているのは、エジプト、メソポタミア（チグリス・ユーフラテス）、インド、中国である。文明が発達し、安定していた地域では、文化が育まれる可能性も大きくなり、周辺には高度な音楽文化や独特の音楽理論が生み出されている。

### 文明発生地域の近くでは音楽も発達？

エジプト、メソポタミア文明の生まれたオリエントの地域には、エジプト音楽、アラブ音楽、イランのペルシア音楽、そして華やかな軍楽で知られるトルコ音楽などがある。この地域の音楽は、ギリシア・ローマの音楽との関わりも深く、ヴァイオリンやピアノの祖先となる楽器があるなど、現在のヨーロッパのクラシック音楽にも、大きな影響を与えて

## 古代四大文明と音楽文化



いる。

また、「ラーガ」と呼ばれる緻密な音階と旋律型の理論を基本とするインドの音楽は、世界の中でも類をみない高度な音楽理論と実践の体系を持っている。日本の文化に大きな影響を及ぼした中国でも、古代から楽舞を含め、音楽が盛んだった。その歴史は、殷(商)の時代くらいまで遡ることができる。

このほか、四大文明の地域からは少し外れるが、インドネシアも、伝統芸能の豊かな国として知られている。

多くの島々には、それぞれ独自の芸能文化があり、とくに、バリ島は、四国の3分の1ほどの大きさでありながら、数多くの高度な芸能を有している。夜、ヒンドゥー教の寺院の前で、車座になった男性合唱の掛け声とともに、インドから伝わった古代叙事詩『ラーマヤナ』を演ずる「ケチャ」や、善悪を象徴する2つの獅子が戦う舞踊劇「パロン」などが代表的だ。「パロン」はさまざまな打楽器を中心とする「ガムラン」が伴奏になっている。

## 楽譜は、作曲家が演奏家に 音楽を伝えるための設計図

### 音の高低を示すために考えられた

小学校の音楽の教科書を見てもわかるように、伝統音楽を別にすると、現在、クラシック音楽はもとより民謡やポピュラー音楽など多くの音楽を記譜するのに「五線譜」が使われている。

五線譜とは、その名称のとおり、5本1組の平行線を使って音の高低を表した楽譜のことで、17世紀以降、ヨーロッパの記譜法の中心となった。

しかし、ただ五線の上に書かれただけでは、基準になる音がわからない。そこで考えられたのが「音部記号」である。五線の中で、どの音を基準にするかを示す記号で、よく知られているのがトの音を基準にするト音記号（別名Ⅱ高音部記号、バイオリン記号）と、への音を基準にするヘ音記号（別名Ⅱ低

どのような速さで、どのように演奏するのか？  
曲のハーモニーとリズムは何か？ 曲の初めにその曲の基本的な情報が、すべて明示されている。

音部記号、バス記号）だ。

これ以外にもソプラノ記号、テノール記号、アルト記号などがある。この音部記号は、楽譜のいちばん最初に記されている。

### 楽譜の初めに基本情報はすべて揃っている






次に示されるのが、「調」である。これは曲のハーモニーを決めるものといえる。調によって、#（シャープ。音を半音上げる）あるいはb（フラット。音を半音下げる）が最大7個まで付く。#もbも付かない場合もある（これがハ長調あるいはイ短調である）が、#とbが交じることはない。

その後、リズムを作っていく拍子が、2つの数字で示され、これは拍子記号と呼ばれる。3/4や2/2などである。下がその曲で基本となる音符の長さ、

## 楽譜の基本的な情報



## おもな記号

音部記号	調号	拍子記号	強弱記号
 ト音記号	 シャープ	 4分の4拍子	 フォルテ
 ヘ音記号	 フラット	 2分の2拍子	 ピアノ

上が1小節の中での基本の音符の数を表している。ちなみによく使う4—4にはCと記号で書く方法もある。以上の音部記号、調号、拍子記号はすべて五線譜内に書かれ、この3つが明記された後、曲がスタートする。

また、この基本情報以外に、曲の速さや曲のイメージが五線譜の上に書かれている。速さの示し方は、「Andante（アンダンテ。歩くような速さで）」というように言葉で書かれる場合と基本音符が1分間に奏するべき拍の数で示される場合がある。

例えば、♩=60は「八分音符が1分間に60回奏される速さで演奏する」を意味している。曲のイメージは、この例には書かれていないが、「appassionato」（熱情的に）や「dolce」（柔らかく・愛らしく）などのようにイタリア語で、速度記号と並んで標記される。

まさに楽譜は、曲の基本構成や、作曲家が意図する曲のイメージや演奏の仕方を演奏家に伝える音楽の設計図のようなものといえる。



## 西洋では7音、 東洋では5音の音階が多い

中世からルネサンスにかけて教会で使われていた音階を基本にした西洋では7音音階が多く、東洋の伝統音楽や民謡では5音音階が多い。

### 西洋の音階の基本は7音

音楽は何からできているのだろうか？ 音楽の基

本構成要素をメロディ（旋律）、リズム（律動）、ハーモニー（和声）の3つとするのは、近代西洋のクラシック音楽の考え方である。世界の伝統音楽には、それぞれ固有の音の捉え方や感覚がある。一般的に、

西洋のクラシック音楽は、明快な音、はっきりとした曲の構成を好み、それに対して東洋の音楽は、微妙な音、即興性の強い曲を好むようだ。

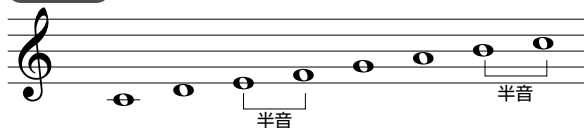
1オクターブの中に、人が音の差を認識でき、使える音は24から48くらいもあるといわれている。しかし、実際の音楽では、限られたいくつかの音が使われていることが多く、西洋のクラシック音楽の場合は7個。その音を並べてみると1つの秩序がある。

この一定の秩序は、隣り合う2つの音の高さの隔たり（これを音程関係という）によって生まれている。この1オクターブ内の音の並び方が「音階」である。ところで音階を構成する音程には、「全音」と「半音」の2種類がある。鍵盤を見るとわかるように、2つの音の隔たりに、全音は黒鍵をはさんでいるが、半音は間に黒鍵をはさまない。

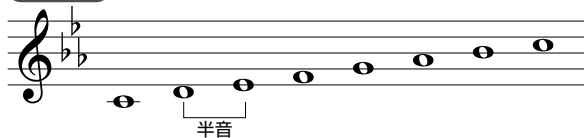
近代西洋のクラシック音楽の7音音階は、5つの全音と2つの半音から構成されている。そのうち第3音と第4音の間、第7音と第8音の間が半音になっているものを「長音階」と呼び、この音階の並び順が長調である。例えば、ミュージカル映画『サウンド・オブ・ミュージック』の『ドレミの歌』で歌われていくドレミファソラシド（ドは、ドーナツのド！ レはレモンのレ……）。これが音階で

## 長音階と短音階

長音階 八長調



短音階 八短調



ある。ドハから始まるこの歌は、つまりハ長調の音階だ。

一方、「短音階」は、第2音と第3音の間が半音になっているもので、耳に明るい感じで響く長音階

に比べ、やや暗い感じがする。長

音階では上行・下行形

とも音は変化しないが、

短音階の場合は、上行

と下行の音と下行的音が

変わるこ

とがある。長音階、短音階とも、

中世からル

ネサンスの時代にかけて、広くヨーロッパで用いられていた「教会旋法」から派生したものである。ちなみに、このほか、全音だけでできている6音音階やすべて半音できている12音音階もある。

### 西アジア地域では、微小単位の音を使う

ところで、西洋の7音音階以外にも、5音音階が世界各地に広く分布している。とくに、日本や中国などの東洋では、5音の音階（ペンタトニックと呼ぶ）が主流だ。わらべ歌や民謡のほか、近年、歌謡曲の分野でも流行している沖縄の唄なども5音音階を基本にしており、この音階で創られた歌はなぜか私たち日本人の郷愁を誘うようだ。

インドネシアのガムラン音楽には、日本の都節音階や沖縄音階に近い音階もある。また、西アジア地域では、西洋の半音よりも微小な音程を基本単位とした音階が考えられていて、ペルシアでは1/4音が基本単位となっていたり、トルコにおいては1音を9等分する1/9音なども使われている。

# 人間の身体の動きや心理にも リズムは深く関わっている

強拍と弱拍の周期的な繰り返しによってリズムは明確になる。世界各地で見られる2拍子は、人間の歩行のリズムと同じで、最も基本的な拍子。

## 時間の刻みを感じるところに リズムがある

メロディ、ハーモニーと共に、音楽を創り上げる重要な要素として、リズムがある。

ところで、リズムとは何だろうか？ 例えば、サイレンの音や警笛が鳴り響くのを聞いた時、私たちはその中にリズムを感じない。しかし雨だれの音やカッコウなどの鳴き声を聞いた時、私たちはなぜかそこにリズムを感じるのではないだろうか。

一定の音が、切れ目がなく鳴り響いている時、その音は聞く人に時間の刻みを感じさせない。一定の音が何回かに分かれて聞こえたり、長短、高低、強弱、音質の変化などがある時、私たちはそこに時間の刻みや経過を感じる。この刻みがリズムになるのである。

## リズムに秩序を与える拍と拍子

西洋のクラシック音楽では、さまざまな種類のリズムが使われているが、それらはまったく秩序なく使われているのではない。一定の時間ごとに刻まれていく単位にのって、音楽のリズムは構成されている。この単位を「拍」と呼ぶ。大勢集まって音楽を聞くと、私たちは手拍子を打つことがある。その時、なぜかみんな同じ刻みで手を打つのではないだろうか。これが「拍」というものと考えられる。

ところで、1拍の刻みは長すぎても短すぎても、私たちはうまく感じる事ができない。普通、音楽で使われる1拍の長さは、0・2秒から1・5秒といわれている。0・2秒の刻みといえば、1分間に約300というかなり速いもので、1・5秒といえ

## 拍子とリズム

拍子の種類	2・4拍子系		3拍子系	
単純拍子	$\frac{2}{2}$		$\frac{3}{4}$	
	$\frac{2}{4}$			
	$\frac{4}{4}$		$\frac{3}{8}$	
複合拍子	$\frac{6}{8}$		$\frac{9}{8}$	
混合拍子	$\frac{5}{4}$			

普通のリズム

$\frac{2}{4}$

シンコペーション

$\frac{2}{4}$

弱起のリズム

$\frac{2}{4}$

拍子

$\frac{2}{4}$

拍節的でないリズム

$\frac{2}{4}$

ば、1分間に約40。疲れ果ててとぼとぼと歩いている時の速さくらいという。

そして拍にのっていくことによつて、リズムには秩序が生まれてくるが、それをより全体的にまとめるのが「拍子」である。拍子は、周期的に力点のある拍を置くことによつ

て、拍の刻みを整理し統合する。この力点のある拍が「強拍」であり、その他の拍は「弱拍」となる。強拍と弱拍の規則的な交代によつて、音楽のリズムはより明確になっていく。多くの場合、第1拍目が強拍である。

拍子の種類は、1拍に数える基本の音符（単位音符）の1小節内にある数によつて、2拍子、3拍子、4拍子と呼ばれていく。拍子は分数の形で書き表され、分母に単位音符の種類、分子に1小節内の単位音符の数が示される。つまり、 $\frac{2}{4}$ 拍子とは、単位音符は4分音符で、1小節には4分音符が2つずつ出てくることを示している。2拍子は1個の強拍と1個の弱拍から構成され、人間の歩行や身体的なリズムに近く、あらゆる拍子の中で最も基本的なものとされている。タンゴやポルカなど数多くの舞曲が2拍子で、東洋諸国の多くの地域にも2拍子は広がっている。また、ワルツなどで有名な3拍子は、西洋ではよく使われているが、日本や中国ではほとんど使われていない。

## 四七抜きと二六抜き。 歌謡曲が好んだ音階

**7音よりも5音でできた  
音階になじむ日本人**

世界各地に広く分布するのは、近代西洋の7音音階ではなく、実は5音音階のほうだ。そして日本も5音音階を主流とする音階を持つ国の仲間といえるだろう。平成の時代に入ってから、日本語のアクセントをほとんど感じさせない、あるいは無視したメロディや、ラップやレゲエ感覚のリズムにのった新しい音楽も増えてきた。

しかし、明治維新以降、音楽教育の中でも、ほとんど西洋の音楽を取り入れてきたのに、5音音階の影響は、唱歌や童謡、歌謡曲などの中に長い間、色濃く影を落としていた。

そのわかりやすい例の一つが日本の歌謡曲に見られる「四七

抜き長音階」と「二六抜き短音階」だ。1980年代に、民族音楽学者として有名な故小泉文夫氏がいくつかの著書の中で紹介している。

**四七抜きは、演歌に圧倒的に多いスタイルだ**

四七抜きとは、7音音階の4つ目と7つ目の音を抜いた音階。つまり、ドレミファソラシドの音階でいえば、ファとシを抜いたドレミソラの音を使って曲ができているものである。

例えば、かつて一世を風靡した『スーダラ節』や1965年のレコード大賞をとった美空ひばりの『柔』、三波春夫の『東京五輪音頭』、森進一の『港町ブルース』、二葉あき子の『岸壁の母』など、数多くの演歌がこのスタイルをとっている。

また、若干の例外はあるものの、すきやきソングとして有名な『上を向いて歩こう』や、かつて子どもに人気があった才バQの主題歌『オバケのQ太郎』、フィンガー5の『学園天国』など少しモダンな雰囲気曲も四七抜きの音階を基本にしている。小学校の卒業式には欠かせない、スコットランド民謡『蛍の光』も実は、四七抜き音階でできている曲だ。

一方、二六抜き短音階一は、二(レ)と六(ラ)の音を抜いた音階で、こちらも演歌だけではなくポップス調の曲も多い。古くなるが、美空ひばりの『リソゴ追分』、五木ひろしの『夜空』のほか、ピンク・レディの『ベッパー警部』、キャンディーズの『春一番』などもこのスタイルの曲である。